

## 自己の強みを自覚し、共感的にコミュニケーションを図ることのできる生徒の育成

○工藤 卓大、山蔭 理恵

## 1 研究主題設定の理由

予測困難であり、厳しい挑戦の時代となりつつある現代、そしてこれからの社会を生き抜くためには、一人一人が持続可能な社会の創り手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人となることが期待されている。また、AIの飛躍的な進化により、外国語教育においても生徒の発達段階に配慮しながらAIを活用する方向性が示されるなど、AIに対する考え方も数年前と変化してきている。学校教育においては、目的や場面、状況等を踏まえ、言語の背景にある文化や相手への配慮をしながら、自分が本当に伝えたいことを伝え合い、理解し合う、AIにはできないコミュニケーションを図る資質・能力の育成がより一層重視されている。

英語科における本校生徒の実態として、概ね積極的にコミュニケーションを図ることができている一方、知識や理解の正確性にこだわるが故に、自らの英語に対して自信を持ちきれない傾向も見られる。そのため、これからの時代を見据えたときに冒頭にあるような個人へと成長することができるか、やや不安が残る。また、生徒が重視する「絶対解」は、AIが全て導き出す時代だからこそ、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや自分自身で課題を考え、問いを見出すことで、自分の人生をより良いものにしていくための資質・能力の育成が欠かせない。それらを踏まえた上で、授業では言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力の育成を柱とし、自己の在り方や良さを自覚させていく。また、生徒同士で互いのよさを理解し合い、足りない部分や違いも受け止め、互いに補い合いながら共感的な対話等を繰り返し、これからの時代を創る人づくりを目指す。

## 2 英語科で育成を目指す資質・能力

| 知識及び技能                                                       | 思考力、判断力、表現力等                                                                 | 学びに向かう力、人間性等                                                      |
|--------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| ○課題解決のために必要な知識を身につけ、実際のコミュニケーションにおいて、自身の経験や既習事項を関連付けながら活用する力 | ○答えのない様々な問いについて考える中で、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて、既習事項を活用して言葉の曖昧さに耐えながら自分の考えを伝え合う力 | ○メタ認知を通して、自己の学習方を振り返りながら、探究心や好奇心をもって最後まで相手を慮りながらコミュニケーションを図ろうとする力 |

学習指導要領において外国語教育を通じて育成を目指す資質・能力全体を貫く軸として他者とのコミュニケーションの基盤の形成が挙げられており、小学校から高校までを貫く目標であることから、コミュニケーションを図る資質・能力の育成は英語教育の要である。コミュニケーションの話題は身近なものから社会的なものまで多岐にわたるが、特に社会的な話題を扱う際には、語彙・表現などが難しく知識が不十分であったり、答えや解決策が一つではないために、考え方が大きく異なったりする。その場合、自分が伝えたいことを正確に表現したり、相手が伝えようとしていることを完全に理解したりすることは容易ではない。そのような状況下でも、それまでの既習表現（知識・技能）を活用しながら、自分が伝えたいことを言い換えたり、相手の考えや気持ちを確認したりしながら、相手の気持ちに寄り添った共感的なコミュニケーション能力の育成を目指す。そのための土台として、それまでの経験からどのような表現や言い方が、相手により伝わりやすいのかを吟味し、自分の考えを最後まで伝えようとする、また相手の考えを汲み取ろうとする態度が必要となると考える。

## 3 研究内容

## 視点① 個別最適な学びと協働的な学び

一人ひとりの興味・関心・キャリア形成の方向性に応じた「学習の個性化」の実現に向けて、個に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行い、きめ細かな指導を通して、生徒が自己の学習状況を把握し、主体的に学習調整を行うことができる環境を整える。また、その学びが個々に独立した学びではなく、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するための活動となるように、常に相手意識をもって取り組ませていく。そのために、自分の言葉や思いが相手に伝わったかどうか、お互いにフィードバックすることで、相手意識をもった共感的な言語活動へとつなげていく。例えば、自分の夢や目標を相手に伝える際、相手を替えながら何度も繰り返し、自分の考えを伝え合う中で、言語面（英語の発音、抑揚だけでなく、身振りやジェスチャーなどの非言語コミュニケーションも含む）や内容面（文章構成、使用言語の質など）の両面から生徒自身が自己の個性やよさを自覚し、より強化していくことを目指す。

## 視点② 教科等横断的資質・能力の育成

文部科学省「義務教育の在り方ワーキンググループ論点整理」（2023）によると「授業や単元を通して、何をを目指すのか、子供たちが見通しを持てていることが重要である」と述べられている。本校英語科では、これまでも単元シートを生徒と共有し、学習の見通しを立て、自らの学びを振り返ることができるようにしている。本研究では、この単元シートに加え、「人生英語ロードマップ」を作成し、これから先の時代を生きていく上で、英語学習で学んだことが生かされる場面を想起させたい。学習指導要領においても、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」と示されている。このことから生涯に渡って学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養が必要であり、将来の活用を見据えた授業構想は不可欠である。

本校では将来を見据えた「人生英語ロードマップ」を通して学びの蓄積を可視化することで、「英語を使って何ができるか」ということを生徒が自覚し、将来のある場面において学んだことが想起され、生かされるようにしていきたい。そのために、英語を使用している国の留学生や中学生と交流する機会を設定し、生徒が将来、社会の中で使う場面があると予想される場面設定や題材を基にして言語活動を行う。生徒が学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりするキャリア・パスポートの英語学習版としての活用を目指すことで、最終的には生徒自身が「自分にとっての英語とは」と考え、1時間1時間の授業が生涯にわたる外国語学習の礎となるようにしていく。